総評 2024 年 10 月分　杉本真維子

「幸せになってねと握られる／てのひら／葉は内側から枯れていく」桜望子（山形県）
言葉のなかに隠れている氷のような部分を敏感に察知しています。握手は思いのほか心の内側に届くものなのだと知りました。

「世界が小さく見えるとき／自分の言葉を信じちゃだめだよ」いまはじまるの（兵庫県）
自分の言葉を信じてはいけない、というときはたしかにあります。

「シャンデリアの／ような腹痛抱え昼寝」吉沢　美香（宮城県）
痛みを巧みに言い当てています。からだの内側の激しい点滅はおそらく多くのかたが自覚できるものでしょう。

「まんじゅしゃげ、／まんじゅしゃげって／歩く犬」日下部　友奏（群馬県）
歩くたびに揺れる犬の長い毛のようすが浮かびます。既成の音を詩のオノマトペに昇華させています。

「地下鉄の水買う打ち明けたいこと／がある」森 榮太（東京都）
たぷんと波打つ水面のエロティシズム。胸中に秘めたものの重さと水の重さとが美しく釣り合っています。

「おおごえって／（まどをこえる）／（さかをくだる）／（うみにとける）／たのしい」白藤　さくら（神奈川県）
声が主体から離れ、旅に出ています。そのようすがとても楽しく、「おおごえ」を出したくなりますね。

「風吹けば風のかたちに沿うように／人の仕草のひとつひとつは」藤井　柊太（神奈川県）
風にやわらかく包まれた人のからだが、風のやわらかさを伝えています。風と人の素敵な関係が描かれていますね。

「切るたびに／ネギ、葱、ねぎと別れゆく」平松　泥沸（兵庫県）
刃からこぼれおちるものはたしかにねぎですが、それは言葉でもあるのですよね。物質と言葉の密な関係について考えさせられました。

「亡き知己の棺に響く雁の聲」伊井　豊浩（千葉県）
ナキチキという撥ねるような音に惹かれました。この音によって何かが生き返っているような気がします。

「私は弱視です／せかいはやさしく／こころとりもどし／私は弱視です」桃源（東京都）
こころとりもどした世界でなければ、このように自らの弱さを語ることはできないかもしれません。社会に対するするどい批評にもなっています。

次回も楽しみにお待ちしています。